

テスト設計コンテスト OPEN クラス - アピールシート

※全体で A 4 縦 1 ページに収まるように記述してください。

地域名

大阪

チーム ID

S270709001

チーム名（ふりがな）

そこに AI はあるんか？（そこにあいはあるんか？）

チーム紹介

チーム名である「そこに AI はあるんか？」は、弊社会長のお気に入りのフレーズから着想を得ています。
主メンバー5名、サポートメンバー3名、東京・名古屋・大阪の3拠点から集まった部門横断チームです。

7月から活動を開始しましたが、本格的な開始は8月に入ってから🌧️
最大の敵は品質リスクでも AI でもなく、メンバーのスケジュールでした。

休日に会社へ集まり、お菓子を食べながら議論を重ねる中で、「そこに AI はあるんか？」よりも、「そこに時間はあるんか？」を連呼する日々。

AI も知恵も出し切りましたが、時間だけは最後まで足りませんでした。
だからこそ、予選を突破して、決勝で完全燃焼したいと思っています。

コンセプト

「プロダクトに愛を、テストに AI を。」 ～ 品質は リスク × 価値 で設計する ～

❤️ 人間 = 深さ 「プロダクトに愛を」 “仕様理解の”深さ”を追求し、価値まで遡って採否と妥当性を判断する”

🤖 AI = 広さ 「テストに AI を」 “候補の発散と網羅を担い、人間は”価値ある判断”に集中する”

工夫点

① 仕様書にない「構造リスク」の発見

V03 の 3 変更を機能追加ではなく構造の変化と読み、入場 QR コードの複数ゲート同時提示による重複入場、ゲート間の状態不整合、ハブ集約による単一障害点を導出。仕様に記載がないため「事実」とせず、状態「導出」「暫定」として区別管理した。

※構造リスク＝仕様書にないが、構造の変化から必然的に生じる品質リスク

② 感情変化のスコア化による影響度評価の妥当性確認

期待状態と価値毀損時の「心の声」を-5～+5 でスコア化し、価値毀損の大きさから影響度「大／中／小」の判断を裏づけた。スコアは影響度を直接決めない補助評価とし、運用継続が可能なリスクは「中」に留めている。

※心の声＝ステークホルダーの期待と不安を一人称で抽出したもの

③ 品質リスクからテスト設計への変換規則

発生条件→テスト条件、発生要因→テスト観点、発生箇所→テストレベル、優先度→テストの厚みと、規則で変換。リスクからテストが導かれたことを手順として保証し、厚み配分の根拠を追跡可能にした。

④ 一気通貫トレーサビリティと確認事項の管理

ビジネス要求からテスト要求まで 6 階層を全件トレースし、孤立・循環がないことを突合。根拠のない値は推測で埋めず、合否判定基準が未確定な項目 11 件として一覧化し、依頼元へ返している。

⑤ AI は発散、人は収束という役割分担

心の声・要求候補・リスク候補・テスト観点の発散は AI が担い、採否は人が要求との整合性や価値・リスクへの影響などの観点から判断した。ペルソナは AI が生成した 8 案から 4 案を採用し、除外理由まで文書化した。AI の出力をそのまま採用したものはない。

要求分析（略号）：BR（ビジネス要求）→ SHR（ステークホルダー要求）→ SR（システム要求）→ QR（品質要求）→ RSK（品質リスク）→ TR（テスト要求）